

語り継ぐ平和への思い

残された家族の思い

総務課総務法制係 ☎ 0824・73・1123

あの戦争から81年。多くの尊い命が失われ、多くの人が傷つきました。長い年月が過ぎた今でも、その時に負った体や心の傷で苦しんでいる人がいます。戦争は、兵士、残された家族…人々の幸せを理不尽に奪い去り、容赦なく傷つけます。そして、傷ついた人の「思い」は、時が経ても、決して薄らぐことはありません。一方で、時の流れとともに、当時を知る人の高齢化は進んでいます。今もなお、世界では、戦争が行われています。だからこそ、なおさら私たちは、当時を知る人の「思い」を学び、それを風化させることなく後世につないでいかなければならないのではないのでしょうか。今回も、先の戦争により、大切な人を失った遺族の「思い」をお聞きました。皆さんもこの「思い」を知り、命の尊さ・平和の大切さについて考えてみましょう。



南原 市子 さん
昭和9年生まれ
92歳 比和町

父の出征前の生活

南

原市子さんは、昭和9年に父・芳雄さん、母・フサノさんの長女として生まれました。後に2歳、4歳違いの妹も生まれ、一家は祖父母と合わせて親子三代が同居する世帯でした。

世帯の生活は、市子さんが2歳の時に祖父が、6歳の時にフサノさんが相次いで亡くなったことから、芳雄さんと祖母シュウさんが切り盛りしていました。芳雄さんが中心となつて農

地でお米を作り、併せて牛飼いと炭焼きで得たお金で生計を立て、家の中のことはシュウさんが取り仕切っていたそうです。

「お父さんは小柄で無口な人。おばあさんは優しくしてしっかりした人。どちらかというとお父さんよりもおばあさんの印象が強く、お父さんの記憶がありません」と、市子さんは当時を振り返ります。

昭和16年、太平洋戦争が始まりました。この頃、米の供出が厳しくなり、食料が不足してきました。この年、市子さんは比和尋常小学校に通い始めましたが、校庭は、空腹をしのぐため、芋畑となつたそうです。

「食料不足で米は供出していたので、麦飯を食べたり、残った米ぬかでおばあさんがぬか団子を作ってくれたりしていた」。これが当時の食料事情でした。

父の出征

昭

和18年、市子さんが9歳の時、当時「赤紙」といわれた臨時召集令状が芳雄さんの下へ。それは、芳雄さんが再婚し、末の妹が生まれて半年後のことでした。

芳雄さんは呉海兵団に入団。同じく比和町から召集された



▲父・芳雄さん

3人と共に、日本最大の海軍工廠（日本海軍の船や兵器を造る軍需工場）のあつた呉へ向かうことになりました。その頃、ガダルカナル島の戦いに敗れた日本軍は、ガダルカナル島を放棄し、撤退を始めます。戦局は日本にとって厳しくなっていました。

出征前、町内の神社で、出征兵士のための祈願祭が行われました。「勝つてくるぞと勇ましく…」と歌いながら、芳雄さんを含む4人はまちはのすれまで送り出されたそうです。

「最後の別れとは思わず送った」。赤紙の本当の意味や日本の戦局など、子どもの市子さんは知る由もありませんでした。

昭和19年10月、いよいよ芳雄さんが戦地へ向かうことが決まりましたが、ちょうど足にけがをしていたため、同じく比和町から入団した3人とは遅れての出発となつたそうです。

このことが、芳雄さんから4人の運命を分けることとなります。

輸送船「浅間丸」に乗船し、

呉を出港した芳雄さんは、3週間後、フィリピンのルソン島マニラに到着し、震洋特別攻撃隊（船首に爆薬を搭載し敵艦に体当たり攻撃をする特攻兵器）付きの主計兵（旧日本海軍で、経理事務・軍需品・被服・兵糧・調理などをつかさどつた兵士）となり、翌11月にはマニラ湾の入りにあるコレヒドール島に配備されました。

年が明けた昭和20年1月、アメリカ軍がフィリピンのルソン島に上陸。このころには既に日本軍の敗色濃厚で、コレヒドール島での戦いもすぐに激化し、同年2月25日、芳雄さんは短い生涯を閉じました。市子さんが10歳の時でした。

「戦死の公報とともに箱が来て、箱の中を開けたら紙1枚が入っていただけだった」。

そして、後に市子さんは知ることとなります。芳雄さんが足のけがにより、同じ時に比和町から召集された3人に遅れて戦地へ向かったことを――芳雄さんより先に戦地に向かった3人は、戦場を生き延び、故郷へ帰ってきたことを――

奪い去られたもの

芳

雄さんが出征し、男手を失つた一家の生活は一変します。市子さんは「おばあさんがやりくりしていた」と言いますが、田んぼは親戚に作ってもらふこととなり、牛飼いの育てた仔牛を親戚に頼んで売ってもらい、それで得た収入とわずかな配給で、シュウさんは家族を養つていかなければなりませんでした。

お金がなくて、物が買えなかつたそうで、市子さんは「服は妹の分も自分で縫つたり編んだりしていた。消しゴムは配給された長靴のかかとを少し切つて代わりに使っていた」と言います。

戦時中は、比和町でも空襲警報が発令され、「ウーウー」とサイレンが鳴ると、夜であれば電球を消し、明かりが漏れないようにしていたそうです。

そして、昭和20年8月、終戦を迎えます。市子さんは、近所のラジオで玉音放送を聞きました。当時、子どもたちの中では、



▲シュウさんと姉妹

私たちにできること

今回の取材の中で、市子さんは、芳雄さんが無口な人だったからか、「お父さんの記憶があまりない」と語られました。しかし、もし、「あの戦争」がなかったらどうだったのでしょうか。お二人に、もっと多くの幸せな時間があつたなら…

また、市子さんは、昭和23年、中学校2年生の時の修学旅行の話もしてくださいました。行き先は、広島のマチだつたそうです。原爆投下から3年が経過していましたが、依然として街中は焼け野原のままで、駅の周りでは、食べるものに困つた人がごみ箱をあさっていたそうです。

これが戦争なのではないでしょうか。戦争は、理不尽に人の命を奪い、傷つけ、家族を引き離し、憎しみ・悲しみを残します。

平和は決して当たり前のものではありません。私たちが心から望み、守り育てていかなければならないのです。

そのためにも、私たちは当時を知る人の「思い」を学び、それを戦争の記憶として後世へ引き継いでいくことが大切なのではないでしょうか。

庄原市戦没者追悼式並びに平和祈念式典

本市の戦没者に哀悼の意を表し、恒久平和を祈念するため「庄原市戦没者追悼式並びに平和祈念式典」を開催します。

多くの皆さんのご参列をお願いします。（申し込みは不要です）

とき 8月19日(水) 10時～
（開場は9時～）
ところ みどりしんきんホール（庄原市民会館） 大ホール

その他

▼当日は要約筆記による案内があります。

▼会場にお越しになれない場合は、職場やご家庭など、それぞれの場所ですれとうをお願ひします。

▼8月10日(月)～17日(月)、市役所本庁舎1階市民ホールで市内小中学生や地域の皆さんが作成した折り鶴、戦中・戦後の人々の暮らしを伝えるパネルなどを展示します。ぜひご覧ください。

問い合わせ

社会福祉課社会福祉係
☎ 0824・73・1153

